

応用力学研究所

I	研究水準	研究 18-2
II	質の向上度	研究 18-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、平成19年度の教員一名当たりの学術論文等の平均出版件数は5.44件であり、そのうち査読によるものが4.10件（75%）である。日本語以外の言語による論文数は一名当たり平均4.06件であり、論文数全体の75%を占めている。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金の採択数（採択金額）が年平均約30件（特別推進研究を除くと約1億円）となっている。さらに、受託研究、共同研究、寄付金の総額は年ごとに増加傾向にあるなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「共同利用・共同研究の実施状況」のうち、3部門と2センターは、適宜、連携しながら国内共同研究と国外の様々な機関との国際共同研究を推進しているほか、研究所主催の国際会議、セミナーも実施している。全国共同利用研究の実施件数は、一般研究は減少しているが、特定研究と研究集会は増加していることなどは、優れた成果であることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、応用力学研究所の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、応用力学研究所が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

2. 研究成果の状況

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、基礎力学、大気海洋、乱流プラズマ等の分野で先端的な研究成果が数多く生まれている。卓越した研究成果として、トカマクの定常運転に対して必要な研究課題を明らかにした成果は、ITER及び将来の核融合炉に価値ある研究と評価されている。社会、経済、文化面では、地球環境に関する分野での優れた研究成果が特に多い。卓越した研究成果として、アジア地域で発生する黄砂や大気汚染物質の輸送に対する3次元大気化学輸送モデルの作成、さらに、風力エネルギーの有効利用のための超高効率風力発電システムの開発があり、高い評価を受けていることなどは、優れた

成果である。

以上の点について、応用力学研究所の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、応用力学研究所が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

II 質の向上度

1. 質の向上度

相応に改善、向上している

当該組織から示された事例は4件であり、そのすべてが、「大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している」または「相応に改善、向上している」と判断された。

